

児童生徒の人間関係調整力の育成に関する研究
—人間関係調整力の定義と、育成プログラムの開発を通して—

Defining and Developing the Interpersonal Adjustment Competency Program
for School Students:

松尾 康則, 葛西真記子

Yasunori MATSUO and Makiko KASAI

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第29号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.29, Feb., 2015

児童生徒の人間関係調整力の育成に関する研究 —人間関係調整力の定義と、育成プログラムの開発を通して—

Defining and Developing the Interpersonal Adjustment Competency Program for School Students:

松尾 康則*, 葛西真記子**

*〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学大学院 臨床心理士養成コース
**〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学学校教育研究科 臨床心理士養成コース
Yasunori MATSUO* and Makiko KASAI**

,Department of Training and Practice in Clinical Psychology, Naruto University of Education
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

抄録：本研究は、児童生徒が人間関係をうまく結ぶ力としての人間関係調整力を育成するために、育成プログラムの開発・検討を行うことを目的とした。

それには、まず、曖昧であり、一般的な概念としては見当たらない人間関係調整力の定義から始めた。しかし、人間関係調整力につながる資質・能力については非常に多岐にわたるものとなるため、育成プログラムを開発していく上では、「他者理解力」「自己表現力」「合意形成力」の3つの力に絞って開発を進めていこうと考えた。また、指導の継続性・系統性を実現するための系統的指導目標の作成を行った。

育成プログラムとしては、①人間関係調整能力の直接的な育成（特活・道徳の時間・HR等を活用した育成）、②人間関係調整力につながる資質・能力の育成（教科の授業における育成）の2方面からの授業実践を行った。その結果、「他者理解力」「自己表現力」「合意形成力」のそれぞれにおいて向上が見られた。

キーワード：人間関係調整力、定義、育成プログラム

Abstract : The purpose of the current study was to develop a program aimed at promoting interpersonal adjustment competency among school students. The concept of interpersonal adjustment competency was defined; based on this definition, we focused on three domains: “competency for understanding others,” “competency for expressing oneself,” and “competency for mutual agreement.” To promote sequential and systematic learning, specific education goals for the program were employed. Two basic strategies were employed: 1) direct education through extracurricular activities, ethics classes, and homeroom classes, and 2) indirect education through regular classes. Results from questionnaires and reaction papers obtained from students revealed that scores for all three competencies increased after the program. Students also reported a heightened awareness of the importance of understanding others, expressing themselves, and mutual agreement.

Keywords : interpersonal adjustment competency, understanding others, expressing oneself, mutual agreement, program development

I. 問題と目的

近年、学校現場における児童生徒の様々な問題は後を絶たず、その中でも特にいじめ、不登校などの問題は社会問題ともなっている。文部科学省（以下、文科省）の平成24年度の調査によると、いじめの認知件数は「いじめ緊急調査」などの取り組みにより、小中高校での合計は197,292件と過去最多の認知件数が発表された。ま

た不登校の小中学生の人数についてはここ数年減少傾向にはあるものの112,689名と10万人を超える児童生徒が不登校状況にある。また不登校の理由としては、「本人に係る状況」の、情緒的混乱(26.6%)、無気力(25.9%)に続き、「学校に係る問題」のいじめ及び、いじめを除く友人関係をめぐる問題が、合わせて16.9%と高い割合を占めている(文科省初等中等教育局児童生徒課, 2014)。一方、内閣府による世界青年意識調査では、日本の青

年の学校に通う意識としては「友達との友情をはぐくむ」が65.7%と最も高く、これは他の4カ国（韓国、アメリカ、イギリス、フランス）との結果と比較しても24～49ポイント上回っている（内閣府政策統括官，2011）。このことは、日本の子どもたちにとって学校は、人間関係をはぐくむ場として重要な意味をなしているということである。

しかし佐藤（2004）は「人間関係の発展を阻む現代的状況」として、人間関係の「希薄化」「閉塞化」「間接化」「拡散化」「寄り添い化」の5つの要因をあげており、これらは大人に限らず現代の子どもたちにも大きな影響を及ぼしている。

これらのことから現代の子どもたちは、「学校で友達と友情をはぐくみたいと強く願っているのだが、様々な現代的状況の影響を受け、人間関係を結ぶ力量が低下しているためにうまくはぐくめず、悩み、ひいては不登校やいじめなどの問題行動にまで至っているような場合も多く存在する」と分析することができる。

そこで本研究では、今日の学校教育の喫緊の課題である児童生徒の人間関係をうまく結ぶ力を人間関係調整力と表現し、それについての分析・定義と、その向上・育成に向けたプログラムの分析・開発を行うことを目的とした。

II. 人間関係調整力について

1. 人間関係調整力の定義

1) 先行研究における定義

上記のような喫緊の課題を改善・克服すべく、子どもたちの人間関係調整力に関する研究がいくつか行われてきた。厚木市教育研究所（2009）では、人間関係調整力を『自己意思に基づいて「どうかかわれば良いか」を判断し、実行する力』とし、またその力を具体的に示す力である「援助・理解・受容・忍耐力・判断・自己表現力・自己肯定感・社会性」の「総合力として調整力が機能する」と捉え、「一つ一つの力量を高めることが、調整力をより良く働かせるために有効である」としている。そして、人間関係調整力を高める具体的な方策については、「だれもが自分なりには他者や集団とより良くかかわろうとする意志を持っている。そうした意志とそれに基づいた行動の両方がともに尊重される（否定されない）場づくりや集団づくりを目指す」とまとめている。

栃木県総合教育センター（2010）では、「人間関係を築く力を育てるための指導の在り方」として、「人間関係を築く力を育てるための指導の在り方を明らかにするために、まず聞く力を高めることに重点を置いて研究」を行い、その結果として、「人間関係を築く力の1つとして他者を受け入れる力が導き出された」「自己調整力が自己

の不安定さを乗り越え、人間関係を築く力の要因になるのである」といった報告がなされている。

関連性のある概念としては、徳永（2012）による社会的能力（social competence / skills）があるが、「社会的能力とは、他者とどのように関係を形成するか行動によって定義されるものである。社会的能力を規定する概念として、社会的スキルや社会コンピテンスがあるが、それらの定義については、一致した見解は得られていない」と述べられている。また、Gresham and Elliott（1993）によると、社会的スキルとは「社会的に受け入れられる行動であり、それによって他者と効果的に相互作用を行い、他者からの否定的な行動を避けることが可能になるもの」とされている。しかしそこでも、「特定の行動という絶対的な規準があるわけではなく、社会の特性や文化など、置かれている文脈に応じて修正される」と述べられているように、概念の定義や具体的な基準となる行動は明らかではない。

2) 本研究における定義

これまで述べてきたように、望ましい人間関係の在り方は、大人や子どもを問わず現代社会における重要な課題である。しかしここでは、「円滑な人間関係をつくりたい」であったり「人間関係を調整することが大切だ」等の言葉はよく聞かれるのだが、望ましい人間関係の具体的な姿は個々において曖昧であり、ましてやそれを構築するための能力としての人間関係調整力という概念においても十分な整理はできていない。そこで、本研究においてはまず、様々な研究においてもまだ十分に捉えきれていない人間関係調整力について、より具体的な定義を試みることで、その後の育成プログラムの開発につなげていきたいと考えた。

さて、人間関係調整力を表現する際、感覚的に「折り合いをつける」とか「バランスをとる」などの様々なイメージで言い表わされることが多いようであるが、多くの大人は、積み重ねてきた社会経験（成功・失敗体験）から自分なりの理解を通して人間関係調整力といわれるこの概念を他者との関係の中で感覚的につかみ、そのときの相手や状況に応じて使い分けるなどして実際の対応に生かすことができています。また人間関係調整力を他者との間で感覚的に共有することで、お互いにより良い関係性を紡ぎだそうとする意志に基づいた相互作用を生み出すこともできています。

これらのことから人間関係調整力を考える上では、自己、他者、相互（集団）といった視点と、理解、受容、表現、合意形成などのキーワードが考えられる。そして、人間関係調整力を定義する上では、本能力が様々な場面・関係性・個人的な資質等の条件のちがひの中で成立する能力であることから、様々な対象や状況に対応できるよ

うな定義にならざるを得ないとも考えた。

これらを基に、本研究における人間関係調整力の定義は、「自分や他者のことを知り（自己・他者理解）、お互いを認め合う気持ちを根底とし（自己・他者受容）、対人関係におけるルールやマナーを守り（ソーシャルスキル）、上手に聞いたり話したりしながら（傾聴力、自己表現力）、自分の感情をコントロールしたり（自己コントロール）、相手の気持ちを考えて行動することで（共感的理解）、他者との関係をよりよい方向に導くように調整するとともに、集団生活に適応しながら対人関係を築き（集団適応能力）、自分を大切にしながら他者をも大切にしながら問題解決策を考え（問題解決能力）、意志決定を行い（判断力・合意形成力）、相互的な活動を通して集団生活を築いていく能力」とする。

2. 人間関係調整力につながる資質・能力（「他者理解力」「自己表現力」「合意形成力」について）

上記の定義からも、人間関係調整力を育成する上で、人間関係調整力につながる資質・能力については非常に多岐にわたるものとなっている。そのため、育成プログラムを開発していく上では、前述の先行研究と同様に、まずいくつかの資質・能力に絞って進めていく必要があると考えた。

中央教育審議会答申（2008）でも、子どもたちの実態から、特別活動における改善の具体的事項において「よりよい人権関係を築くための社会的スキルを身に付ける活動」「合意形成をする話し合い活動」の充実をあげているように、人間関係調整力と合意形成力は現代の重要な資質・能力と言える。また木内（2007）は、高等学校の特別活動の時間の4つの事例を、協創体験尺度を基に検討し、合意形成力は『「自己表出性」「仲間受容性」を基盤にした活動』が産み出した成果の一つであると述べている。

これらのことから今回は、前述の定義の中から「他者理解力」「自己表現力」「合意形成力」の3つの力を特に重要視し、この3つの力に視点を絞って開発を進めていきたいと考えた。

そこで、木内や神谷（2009）らの先行文献等を踏まえて、3つの力についての定義と、育成に向けた方針や配慮事項等についての考えを述べる。

1) 他者理解力について

他者理解力とは、他者の考えを能動的に傾聴し、相手の立場に立って相手の考えや気持ちがわかるような想像力を持ち、共感的に理解すること。それには、まず自分と向き合い、自分を認め、自分らしく行動することを根底としたうえで、友達のよさを認め、信頼しあう関係づくりが大切である。

その育成には、まず学校や教室が、自分のことを分かってくれる、安心できる場所である、といった安心感を持てる場所であり、自分のことを友達や先生は受け止めてくれるといった受容感を感じていることで、はじめて他者への様々な配慮が生み出されると考える。

2) 自己表現力について

自己表現力とは、他者との交流の中で、自分の考えや気持ちを相手に適切に表現することができること。特に人間関係調整力につながる資質・能力としての自己表現力としては、相手の話を傾聴し、他者の考えも考慮しながら、目的意識をもって、客観的な評価に基づき考えの正当性を適切に説明できる表現力が求められる。

その育成には、自分の気持ちや考えを相手に伝えるが、相手のことも配慮するやり方、自分も相手も大切にしたい表現（アサーティブ）能力の育成が必要であると考えられる。なお、アサーティブな自己表現とは、攻撃的な方法でも、非主張的な方法でもなく、自分の気持ち、考え、信念に対して正直・率直に、また、その場にふさわしい方法で表現することである。

3) 合意形成力について

合意形成力とは、互いの思いや願いを理解し合い、互いの意見のよさを生かし合ったり、異なる意見について説得し合ったりなどしながら折り合いを付けることで、よりよい解決方法を見出すことができること。それには自分の要求や考えを一方向的に主張するのではなく、自己をコントロールし、他者理解力、自己表現力を基に他者の考えを傾聴し、客観的な評価に基づき考えの正当性を適切に説明でき、人間関係を調整すべく話し合いを通して、自分の意見を変容させたり、他の意見に譲歩したりして集団としての意見をまとめることができるといった相互的能力の育成が重要である。

その育成には、協働することの素晴らしさや、集団の形成に対して自分は役に立っているといった達成感・有用感を感じさせることが重要であり、集団生活の向上に向けて、友達の立場や気持ちを考えて、今自分がどうすることがよいか決定できる、などといった自分自身として適切と思われることを判断し、選択し、決定するという判断力を育成する必要があると考える。

III. 育成プログラムについての考え方

1. 人間関係調整能力の直接的な育成（特活・道徳の時間・HR等を活用した育成）

日常の様々な場面において、人間関係調整力を直接的に育成するための手立ては非常に有効である。子どもたちは感情の制御が未熟で、日常の生活場面において、一

方的に感情をぶつけたり、突発的な思いから行動することで思わず人間関係がこじれることも多く、またいったんこじれると大人のように人間関係を修復・改善したり解決したりするための力も未熟である。そこで、様々な集団活動を通して相互にかかわり合い、具体的な課題に取り組む中でよりよい人間関係を構築していく営みを体験させることで、実感として人間関係調整力をつかませることを通して育成を図ることをねらいとする。

文科省中学校学習指導要領、特別活動における学級活動の目標は「学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる」であり、これはまさに人間関係調整力や問題解決能力の育成を目的としたものといえる。

そこで、学級活動において、学級や学校で生徒が当面する諸課題への対応に資する活動〔(1)ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決〕と合わせて、直接的に人間関係調整力の育成を図る〔(2)イ 自己及び他者の個性の理解の尊重、才 望ましい人間関係の確立〕ことを目的とした教育活動、教材を工夫・検討して実施するものである。

育成に向けた具体的な手立てとしては、まず日常の様々な活動を行う際、その活動において考えられる「望ましい人間関係」のイメージを子どもたちに具体的な姿での共有化を行う。次に「人間関係を調整する」という言葉のイメージをその場に応じた具体的な態度や行動として分かりやすく伝え、実際の生活・学習場面の中で実践しながら体得できるようにするといった指導が考えられる。

また、子どもたちの実態に応じて、特に培いたい能力等がある場合は、具体的な場面を設定して、擬似体験を

表1 中学校学習指導要領、道徳、内容項目より抜粋

1-(5) 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する。
2-(2) 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。
2-(5) それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方があることを理解して、寛容の心をもち謙虚に他に学ぶ。
4-(1) 法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。
4-(3) 正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める。
4-(4) 自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。

通して、解決するような手段を考え実行していくような学習活動（例：ロールプレイング、シミュレーション、ディスカッション等）も有効であろう。

その際、行動化に向けた意識付けのために、道徳の時間等を活用して、よりよい人間関係を築くことの価値やそこに向けて行動を起こすことの素晴らしさを実感することも重要となる。これは文科省中学校学習指導要領、道徳における以下の内容項目と一致するものである。

2. 人間関係調整力につながる資質・能力の育成（教科の授業における育成）

（実践例としては、資料1を参照）

人間関係調整力につながる様々な資質・能力（今回は特に「他者理解力」「自己表現力」「合意形成力」の3つの力）を教科の授業の中で育成するための手立てを講じる。ここでは、教科の目標や授業におけるねらいを達成しながら、同時に様々な資質・能力についても育成を図ることをねらいとする。

その際、人間関係調整力の育成を目的とする授業展開であるのだから、単元や授業の中に、子どもたちがお互いにかかわり合い、共に学ぶ学習（共同学習）の場面をどう仕組むのが重要となってくる。また児童生徒の実態を踏まえることはもちろん重要なことではあるが、より一般的な実践プログラムを構築する上では指導の系統性を指し示すことも必要となる。

1) 共同学習（交流活動、教え合い学習、協働作業など）について

（「人権尊重の学校づくり推進指定校事業報告書」須恵中学校より引用）

共同学習の方法としては、教科の取り扱う内容や単元の構成により、交流学习、教え合い学習、協働作業といった方法が考えられる。また、授業の最後に、自己評価活動とあわせて相互評価活動を組み合わせることで、自分の活動に対する他者からの前向きな評価や意味付けがなされたとき、授業で培われた力の向上を再確認できるとともに、相互の人間関係の深まりも期待できる。

○交流活動

他者との交流を通して自分の考えを深め広げるとともに、自他の価値を認め合い、思考力・判断力・表現力を育成する活動。他者への共感的理解を促しながら、他の人と対等で豊かな関係を築くことのできる社会的技能の育成を図る（図1）。

○教え合い学習

相互の教え合いにより、基礎・基本が身についている生徒の理解を伸ばし、そうでない生徒の基礎・基本の定着を図り、知識・技能を育成する活動。その際、双方が相手の気持ちや・考えを思いやりながら知識等の理解に

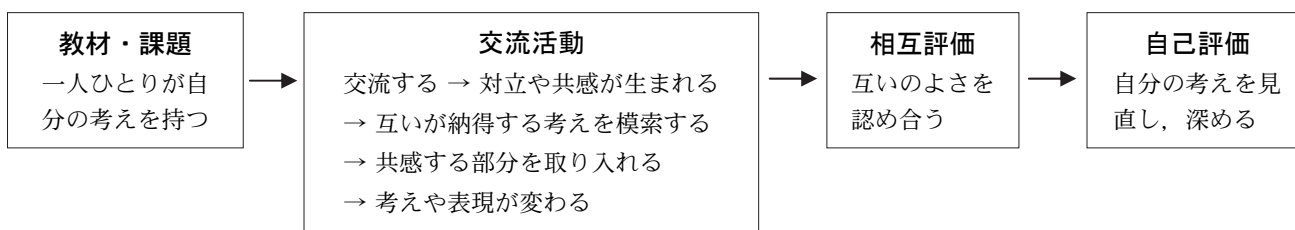


図1 活動例

努めようと活動することで、達成後の相互の人間関係が深まることが期待できる。

○協働作業

目的を達成するために互いの役割を分担し、協力することの価値を味わわせる活動。基礎・基本の技能の習得をねらいとした学習でも効果的である。また、その際に派生する様々な問題を互いに意見交換しながら解決を図るように促すことで、共同による問題解決的な場面も期待できる。なおその際の留意点としては、明確な達成目標・客観的な評価基準・具体的なアドバイスの視点等の工夫や提示が重要である。

共同学習を実施する上での工夫（教材、題材、教具、指示・発問、評価活動など）としては以下のような点があげられる。

- ・話し合いの根拠をつくるための視覚に訴える視聴覚資料の工夫
- ・話し合いを導くための学習プリント・発問・教具の工夫
- ・話し合いを円滑に進めるための技法の工夫（バズセッション、ブレインストーミング、マトリクス法など）
- ・活動を振り返り定着を図るための評価活動の工夫（自己評価、相互評価、シェアリングなど）

2) 指導の継続性と系統性への配慮

人間関係調整力といった複雑な概念は、一朝一夕に培われるものではない。長いスパンを視野に入れた、継続して丁寧な指導を行っていくことで、徐々に子どもたちに培われていく能力である。そのためには、小中高の異校種間にまたがった、子どもの発達段階を踏まえた系統的指導の積み重ねが重要となる。

それを実現するには、指導の拠りどころとなる系統的指導目標（系統表）が必要となってくると考えた。そこで、3つの資質・能力についての小・中・高等学校における系統表を表2に示す。

なお系統表を作成する上で、教科等指導への位置付けという観点から、3つの力の各学年で育成する力については、小・中学校は、国語科指導要領の「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の指導事項である「話すことに関する指導事項」「聞くことに関する指導事項」「話し合うことに関する指導事項」「書くことに関する指導事

項」から定義する。また高等学校については、同様に国語科・国語総合の「話題について自分の考えを持つこと、論理の構成や展開を工夫することに関する指導事項」「効果的に話すこと、的確に聞くことに関する指導事項」「工夫して話し合うことに関する指導事項」から定義するものとした。

IV. 育成プログラムの実践

本稿では紙面の都合上、実践例として「人間関係調整能力の直接的な育成」のみを示す。本実践は、総合単元的な単元構成による授業実践を行った（資料2参照）。

1. 対象

2校の小学校から入学して間もない時期のA中学校1年3組の生徒33名（男子18名、女子15名）を対象とした。

2. 実践内容

ほぼ1週間ごとに、50分の授業を5回、学級担任ではない筆者が行った。単元の構成は表3に示す通りである。

表3 単元構成（5時間） [] 内は内容項目

- | |
|---|
| ①【道徳】（5 / 22）：『大縄跳び』 [4 - (4)]
協力することの素晴らしさ（価値的・態度的側面） |
| ②【道徳】（6 / 5）：『初めの一步』 [2 - (5)]
お互いの意見を尊重し、より質の高い結論に結び付けることの素晴らしさ（価値的・態度的側面） |
| ③【道徳】（6 / 12）：『一緒じゃないとダメですか？』 [4 - (3)]
相手の立場に立ち、共感的に想像する能力の育成（技能的側面） |
| ④【特活】（6 / 19）：『自分の意見をちゃんと言う』 [(2) - イ]
自己表現能力の育成（技能的側面） |
| ⑤【特活】（6 / 25）：『相手の意見をしっかり聞き、自分の意見もしっかり言い、お互いに納得できるちょうどよいところに折り合いをつけるスキルのトレーニング』 [(2) - オ]
自分の要求を一方的に主張するのではなく建設的な手法により他の人との人間関係を調整する能力及び自他の要求を共に満たせる解決方法を見いだしそれを実現させる能力やそのための技能の育成 |

表2 人間関係調整力につながる資質・能力の系統的指導目標（系統表）

	自己表現力	他者理解力	合意形成力	
定義	自分の考えや気持ちを相手意識、目的意識をもって適切に表現する力	他者の考えを能動的に傾聴し、理解（しよう）する力	様々な考えを双方にとってプラスになるように導き解決する力	
小学校	低学年	・相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて話す。 ・語と語や文と文との続き方に注意しながら、つながりのある文や文章を書く。	・大事なことを落とさないようにしながら、興味をもって聞く。 ・書いたものを読み合い、よいところを見つける。	・互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合う。 ・書いたものを読み合い、よいところを見つけて、感想を伝え合う。
	中学年	・相手や目的に応じて、理由や事例などを挙げながら筋道を立て、丁寧な言葉を用いるなど適切な言葉遣いで話す。 ・書こうとすることの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書く。	・話の中心に気を付けて聞き、質問をしたり感想を述べたりする。 ・書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を持つ。	・互いの考えの共通点や相違点を考え、司会や提案などの役割を果たしながら、進行に沿って話し合う。 ・書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合う。
	高学年	・目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら、場に応じた適切な言葉遣いで話す。 ・事実と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりする。	・話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめる。 ・書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目する。	・互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合う。 ・書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合う。
中学校	1年	・全体と部分、事実と意見との関係に注意して話を構成し、相手の反応を踏まえながら話す。 ・伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書く。	・必要に応じて質問しながら聞き取り、自分の考えとの共通点や相違点を整理する。 ・書いた文章を互いに読み合い、題材の考え方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見を持つ。	・話し合いの話題や方向をとらえて的確に話したり、相手の発言を注意して聞いたりして自分の考えをまとめる。 ・書いた文章を互いに読み合い、題材の考え方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりする。
	2年	・異なる立場や考えを想定して自分の考えをまとめ、話の中心的な部分と付加的な部分などに注意し、論理的な構成や展開を考えて話す。 ・事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書く。	・話の論理的な構成や展開などに注意して聞き、自分の考えと比較する。 ・書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料の活用の仕方などについて意見を持つ。	・相手の立場や考えを尊重し、目的に沿って話し合い、互いの発言を検討して自分の考えを広げる。 ・書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料の活用の仕方などについて意見を述べたり助言をしたりして、自分の考えを広げる。
	3年	・社会生活の中から話題を決め、自分の経験や知識を整理して考えをまとめ、語句や文を効果的に使い、資料などを活用して説得力のある話をする。 ・論理の展開を工夫し、資料を適切に引用するなどして、説得力のある文章を書く。	・聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分のものの見方や考え方を深めたり、表現に生かしたりする。 ・書いた文章を互いに読み合い論理の展開の仕方や表現の仕方などについて評価する。	・話し合いが効果的に展開するように進行の仕方を工夫し、課題の解決に向けて互いの考えを生かしあう。 ・書いた文章を互いに読み合い、論理の展開の仕方や表現の仕方などについて評価して自分の表現に役立てるとともに、ものの見方や考え方を深める。
高等学校	・話題について様々な角度から検討して自分の考えをもち、根拠を明確にするなど論理の構成や展開を工夫して意見を述べる。	・目的や場に応じて、効果的に話したり的確に話したり的確に聞き取ったりする。	・課題を解決したり考えを深めたりするために、相手の立場や考えを尊重し、表現の仕方や進行の仕方などを工夫して話し合う。	

単元の前半(①, ②)では、道徳の時間を活用して、「協力すること」、「互いの意見を尊重し、より質の高い意見に結び付けること」などの価値の学習を、その後の学習の意識付けともあわせて行った。題材としては、体育会の取り組みや生徒会専門委員会の活動とあわせて、より子どもたちの生活場面に即した内容で行った。

単元の中盤(③, ④)では、道徳と学活の時間を活用し「相手の立場に立ち共感的に想像・理解する能力」、「相手の気持ちを尊重しながら自分の意見をきちんと言う自己表現力」の二つの能力の育成を目指した。特に自己表現力の育成においては、対人関係能力を育てるソーシャルスキルとして、自分も他人も大切にする伝え方の一つである「アサーショントレーニング」をロールプレイングを用いた方法で実施した。

単元の後半(⑤)では、学活の時間で「相手の意見をしっかりと聞き、自分の意見もしっかり言い、お互いに納得できるちょうどいい所に折り合いをつける技能の育

成」を目指した。授業では、課題に対して、班での話し合い、全体での意見交換と進むが、その際、各班から出された意見を分類・整理させながらそれを視覚的にとらえやすい図(ペイオフ・マトリクス法)の中に整理させ、根拠を基に合意を形成していくようなスキルトレーニングの活動を体験させた。

3. 実践の結果

単元構成の実施前と実施後にアンケート調査を行い、単元における学習の効果の測定を行った。項目はA中学校人権意識調査の内容の抜粋とSEL-8S(社会性と情動の学習)の自己評定尺度の内容を一部引用して12問の質問で実施した(表4)。

また毎授業の終わりに、授業の内容に関する感想を書いて提出してもらった(表5)。

表5 授業の感想

(②の授業後の生徒の感想)

○理恵さんはみんなから言われて一人で起こるんじゃなく、相談して次のことを考えることがすごいと思うし、学べました。

○いらいらしても自分だけで考えこまずに、友達や母や父などに相談する。また相手の悪いところを思ったり言ったりするのはなく、自分の悪いところも見つけてよりいい結論になるようにする。

(④の授業後の生徒の感想)

○これからは相手の気持ちになって、すぐに人の悪口などを言わないようにして、たくさん人の立場になって考えたいと思いました。

○人が悩んでいることをひどい言葉で言うのはいけないと思う。もしかしたら、私も言っているかもしれないから、相手の気持ちをしっかり考えて話すことが大切だと思う。

○今日の授業でうまく伝えることの練習ができました。もしそういう場面があったらいかせるように頑張ります。

○わかりやすく伝えることだと思います。断るときは人が嫌な思いをしないように、もちろん自分もいやな思いをしないようにすることはとても大切なことだと思います。

4. 考察

単元の全般を通して、生徒の反応としては意欲的に学習に取り組むことができていた。培おうとした一つ一つの資質や能力についてもしっかりと考え、身につけようとする姿が多くみられた。生徒の感想等については「道徳通信」を授業後に発行し、生徒に返すことで他の生徒の考えにふれ、理解を深めるとともに、次時の意欲付けにもつながったと思う。

アンケートの結果としては、他者理解力に関する質問項目(1・8)、自己表現力に関する質問項目(3・5・11)、合意形成力に関する質問項目(7・12)において大きな変容が見られた。その中でも質問5「私は、自分の伝えたいことを分かってもらえるようにきちんと伝えられる」、質問12「私は自分の考えを通すことよりも周りの意見も聞いて結論を出そうとする」において、「時々そう思う」から「いつもそう思う」への変容が特に顕著であった。授業において、スキルの獲得や合意形成することの価値を学べたということなのであろう。

V. 総合考察と課題

1. 総合考察

本研究ではまず、人間関係調整力を定義することから始めた。この能力は、学校現場を始め様々な領域におい

表4 実施前後のアンケート結果(数値は%)
(ア いつも・とてもそう思う イ 時々・少しそう思う ウ あまり思わない エ 全く思わない)

質問内容	ア		イ		ウ		エ	
	前	後	前	後	前	後	前	後
1 私は、友だちの気持ちが分かる。(他者理解)	18	33	70	58	12	3	0	6
	+15		-12		-9		+6	
2 私は、人がいやがることをしない。(自己コントロール)	9	12	44	33	41	48		6
	+3		-11		+7		+6	
3 私は、いやな時には、人とけんかにならず「いやだ!」と言える。(アサーション)	27	39	36	42	24	18	12	0
	+12		+6		-16		-12	
4 私は分からないことがあるとき黙っていないでまわりの人に聞くことができる。(対人関係力)	70	55	24	30	3	12	3	3
	-15		+6		+9		-	
5 私は、自分の伝えたいことを分かってもらえるようにきちんと伝えられる。(自己表現力)	15	36	67	45	15	18	3	0
	+21		-22		+3		-3	
6 私は、人がうれしいと自分もうれしい。(共感的他者理解)	39	42	52	55	6	0	3	3
	+3		+3		-6		-	
7 私は意見の違う人とも、わかり合えるまで話し合う必要があると思う。(合意形成力:価値)	15	27	52	39	30	21	3	12
	+12		-13		-9		+9	
8 私は、他の人の立場に立って、その人の気持ちを考えることがよくある。(共感的想像力)	16	33	69	52	16	15	0	0
	+17		-17		-		-	
9 私は、困っていたり悩んでいる友達をみたら、どうしたのか気になる。(共感力)	67	70	30	24	3	6	0	0
	+3		-6		+3		-	
10 私は自分とは考えが違って相手の言うことは最後まできちんと聞くことができる。(傾聴力)	27	33	55	45	18	21	0	0
	+6		-10		+3		-	
11 私は相手の人にわかってもらうまで、自分の気持ちをきちんと伝えることができる。(コミュニケーション能力)	21	36	58	45	21	18	0	0
	+15		-13		-3		-	
12 私は自分の考えを通すことよりも周りの意見も聞いて結論を出そうとする。(人間関係調整力)	9	39	67	39	21	21	3	0
	+30		-28		-		-3	

でも現代的な課題として非常に頻繁に用いられる言葉であるが、その受け取られ方は曖昧で感覚的である。定義を行うことで、今後各地で子どもたちの課題克服に向けた取り組みを組み立てていく際の一助となればと思う。

人間関係調整力につながる資質・能力については非常に多岐にわたるものとなったため、育成プログラムを開発していく上では、「他者理解力」「自己表現力」「合意形成力」の3つの力を取り上げ、定義と指導目標の作成を試みた。特に指導の継続性・系統性の視点は、人間関係調整力を育成する上で重要な視点であると考えている。

育成プログラムとしては、①人間関係調整能力の直接的な育成（特活・道徳の時間・HR等を活用した育成）、②人間関係調整力につながる資質・能力の育成（教科の授業における育成）の2方面からの実践を提案し、昨年・一昨年に実際に行った授業実践を掲載した。単元の前夜に行なったアンケートの結果の数値は全体的に向上しているのだが、今回の一連の授業が子どもたちの考え方の変化にどのくらい寄与できたのかを測ることは難しい。本実践は当初、効果測定を目的としていなかったため統制群（学級）を設定していなかったということもあるが、特にこの期間には体育会の取り組みや、ふれあい合宿、生徒総会に向けた学級審議などがあり、子どもたちの人間関係調整力の育成につながる様々な要因が多く含まれているからである。ただし、授業者の授業以外での影響を排除するため、学級担任でない筆者が当該学級で授業を行ったのだが、授業の中での班活動や交流場面における子どもたちのかかわり合いなど、授業を重ねるごとに向上が感じられた。また、子どもたちの日頃の様子からも、それまで日常的に見られた他者に対するからかいや相手を思いやれない言動、給食・掃除時間等の協力性などはかなり改善が見られたようである。

2. 今後の課題

今後の課題としては、授業実践の実証的な研究の継続が望まれる。2種類の育成プログラムの考え方のもと授業実践を積み重ねることで、人間関係調整力の向上に寄与する授業の在りようについてさらに具体的に示していくとともに、今回提案した内容（人間関係調整力の定義、つながる資質・能力、系統表など）の再検討・見直し、更には、他の資質・能力への拡大などが必要である。その上では、特に以下の視点での検討が重要となる。

1) 資質・能力を育成するための年間を通じた授業実践の必要性

各教科の特質を生かして、積極的な授業実践が望まれるが、授業時数との兼ね合いもあり、無定量的な実施は望みにくい。そこで、各教科・領域における年間指導計画（重点単元の指定）を作成することで、学校として計画的な

資質・能力の育成を図ることができる。その際、系統表の根底となっている国語科での指導内容・指導時期との整合性の整理を行うことで、より系統的な計画となり得ると考える。

2) 共同学習の内容の充実と整理

共同学習における話し合い活動の充実には、第一に、話し合い活動に値する課題の設定があげられる。ただ話し合わせればよいのではなく、子どもたちが「話し合いたい」「話し合うことで答えを見つきたい」と思える価値ある課題の設定が重要である。教科の学習内容において、課題の精選及び提示方法の工夫などの検討が望まれる。

また、話し合い活動の構造化に向けた学習方法や形態の工夫・開発も重要である。そこでは、育成したい資質・能力と学習展開との関連性も整理できるのではないかと考える。

3) 話し合い活動の有効性と効率性

授業の限られた時間の中で充実した話し合いとするためには、発言の仕方や話し合いのきまり・約束を整理し、訓練することで話し合い活動の更なる有効性と効率性を図ることができる。そこでは、グループの人数や机の配置、教具、時間などシステム的なことの研究・確認から、発問や進め方のモデル及び系統的発展モデルなどの整理・作成があげられる。

4) 他の資質・能力への拡大

今回は特に「他者理解力」「自己表現力」「合意形成力」の3つの力に視点を絞って開発を進めたが、子どもたちの人間関係調整力を育成する上では、更に他の資質・能力の育成が必要である。特に子どもたちの様子を見ると、対人関係におけるルールやマナーを守る「ソーシャルスキル」や、自分の感情をコントロールする「自己コントロール」、集団生活に適応しながら対人関係を築く「集団適応能力」が次の課題になるのではと感じられる。

引用文献

- 厚木市教育研究所（2009）、児童・生徒の人間関係調整力の育成に関する調査研究、平成20年度研究紀要第82集、1－45
- 中学校学習指導要領（2012）、第3章道徳、第5章特別活動
- Gresham, Frank M.& Elliott, Stephen N.(1993),Social Skills Intervention Guide: Systematic Approaches to Social Skills Training. Special Services in the Schools; Vol. 8(1)
- 神谷なおみ（2009）、合意形成をする話し合い活動の工夫－伝え合う力を活用し、話し合いをまとめる力を育てる

- 指導を通してー, 平成21年度東京都教員研究生カリキュラム開発研究報告, 1-4
- 木内隆生 (2007), 高等学校特別活動で育成される合意形成力ー協創体験過程の実践家に向けてー, 九州女子大学紀要, 第44巻3号, 1-15
- 小泉令三・山田洋平著 (2011) 子どもの人間関係能力を育てるSEL-8S③社会性と情動の学習 (SEL-8S) の進め方ー中学校編, ミネルヴァ書房, 1-236
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2014), 平成24年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」
- 内閣府政策統括官共生社会政策担当 (2011), 第8回世界青年意識調査 (HTML)
- 佐藤啓子 (2004), 求められる「人間関係力」, 現代のエスプリ (448), 5-20
- 栃木県総合教育センター (2010), 人間関係を築く力を育てるための指導の在り方, 平成21年度調査研究報告書, 1-32
- 徳永豊 (2012), 子どもの「社会的能力」と「情動調整力」を高める指導ー「生きる力」の一つの軸としてー福岡大学研究部論集, B, 社会科学編5, 15-21

謝辞

本研究は、福岡県教育委員会指定「人権教育の系統的指導プログラム開発指定校事業」(平成24・25・26年度)における桂川中学校区での研究内容をもとに作成したものであり、桂川町を初め桂川中学校区小中学校の教職員の皆様、指導助言者の福岡教育大学樋口裕介准教授、先行研究の「人権尊重の学校づくり推進指定校」(平成21・22・23年度福岡県教委指定)である須恵中学校の井本剛先生には多大なる御協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

資料1 第3学年1組 理科学習指導案 指導者 松尾康則 単元名「水溶液とイオン」〔抜粋〕

単元の目標

- 水溶液とイオンに関する事物・現象に進んでかわり、それらを科学的に探究するとともに、事象を日常生活とのかわりで見ようとする。【自然事象への関心・意欲・態度】
- 水溶液とイオンに関する事物・現象の中に問題を見だし、目的意識を持って実験を行い、事象や結果を分析して解釈し、自らの考えを表現することができる。【科学的な思考・表現】
- 水溶液とイオンに関する実験の基本操作を習得するとともに、実験を適切に実施・記録することができる。【観察・実験の技能】
- 実験を通して、水溶液とイオンに関する事物・現象についての基本的な概念や原理・法則を理解し、知識を身につけている。【自然事象への知識・理解】
- 実験について、その結果の予想や考察を交流する活動を通して、他者の考えを共感的に受容しながら自分の考えを深め、広げることができる。【自己表現力、他者理解力】
- 実験の際に、班や小グループで協働して行うことで、安全で適切な方法で目的を達成することができる。【合意形成力、問題解決能力】

本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	形態	評価
つかむ	1. 前々時の塩化銅水溶液の電解実験について想起させる。 ・陽極に塩素が発生、陰極に銅が析出 ・塩化銅は塩素と銅の化合物であり電流を流すことで電気分解が起こったこと。 2. 他の電解質水溶液（塩酸）でも同様のことが起こるのかを予想し、学習のめあてを確認する。	○前回の実験を振り返らせながら、想起させる。 ・どちらの極かは、今は覚えなければならないが、この単元の学習を進めることでいずれは暗記しなくてよくなることを予告しておく。 ○化学式から塩酸は塩素と水素の化合物である塩化水素の水溶液であることに気づかせる。	個	
	めあて 塩酸に電流を流し、発生した物質を調べよう。		個	
見通す	3. 実験の方法を理解する。 ・ホフマン型電解装置の使い方について 4. 塩酸でなく水を使って装置の取り扱いの練習をする。	○液だめの高さやH字管内の水位の高さの関係を理解させる。 ★班で協働し、的確なアドバイスを送りながら練習させる。【合意形成力、問題解決能力】	一斉 班	関意
追求する	5. 実験を行う。 ・気体が両極で発生する。 ・電圧を大きくすると発生量が増える。 ・各極ごとにたまった気体の同定実験を行う。 6. 実験結果を確認する。	★班で協働し、的確なアドバイスを送りながら実験させる。【合意形成力、問題解決能力】 ※塩酸の取り扱いに十分注意させる。 ○全体で実験結果を確認させ表現させる。	班 個	関意 技能
	7. 本時のまとめを理解する。 ・アンダーラインの空欄の部分を個人で考え、小グループごとに確認させる。 ・発表を全体で確認する。	○本時のまとめを行い、学習についての振り返りを行わせる。 ★少人数で意見を出し合いながら、グループとして答えを作り上げることに重点を置く。特に化学反応式の部分は教え合い学習により理解をはからせる。【自己存在感、共感的人間関係】	個 小班	
まとめる	まとめ ・塩酸に電流を流すと陽極に塩酸が陰極に水素が発生する。 ・塩酸は塩化水素の水溶液であり、電流を流すことで成分の塩素と水素に分解した。		一斉	
	8. 相互評価・自己評価を行う。	★互いの頑張り进行评估させる。【自己存在感、自尊感情】	小班	

資料2 第1学年3組 総合単元的な道徳・学級活動学習指導案 指導者 松尾康則

横断的単元名「自他の要求を共に満たし実現させる価値や態度、技能を学ぼう(人間関係調整力を高めよう)」〔抜粋〕

横断的単元指導計画(5時間)

	学習活動・内容	教師の支援	評価
掴む見通す	1【道徳】協力することの素晴らしさの価値を実感する。 〔4-(4)『大縄跳び』〕 2【道徳】互いの意見を尊重し、より質の高い結論に結び付けることの素晴らしさの価値を実感する。〔2-(5)『小さな一歩』〕	○体育会の取り組みで体験している内容をもとに考えさせる。 ○専門委員会活動を題材とした身近な内容から考えさせる。	
追求する	3【道徳】相手の立場に立ち、共感的に想像する能力を育成し、価値を実感する。〔4-(3)『一緒にやないとダメですか?』〕 4【学活】相手の気持ちも尊重しながら自分の意見をきちんと言う自己表現能力を育成する。〔(2)-イ〕	○読み物教材の登場人物となって、その人の立場に立って気持ちを考えたり、言葉を考えさせる。 ○自他を大切に自己表現の方法を考えるために、自己表現の3つのタイプについて比較させながら、適したやり取りを小グループで体験させる。	関・意・態 表現・技能
まとめる	5【学活】相手の意見をしっかり聞き、自分の意見もしっかり言い、お互いに納得できるちょうどよいところに折り合いをつける能力を育成する。〔(2)-オ〕	○課題に対して班で話し合いをさせ、発表させた後、思考が深まるように論点を視覚的にとらえさせながら、全員が納得できるような工夫を基に折り合いをつける行程を体験させる。	関・意・態 思考・判断 実践

単元の目標

- 意欲的に人間関係調整力を育成する様々な活動に参加しようとする。(関心・意欲・態度)
- 協力することや、互いの意見を尊重しより質の高い結論に結び付けることの素晴らしさを実感する。(知識・理解)
- 共感的に相手を理解し、自分の意見を正しく主張する技能を高めることができる。(表現・技能)
- 相手の意見をしっかりと聞き、自分の意見もしっかり言い、お互いに納得できるちょうどよいところに折り合いをつける技能を身につけることができる。(思考・判断・実践)

本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	形態	評価
つかむ	1 これまでの学習を振り返り、本時の学習内容を理解する。 ・相手の意見を聞くことは大切 ・相手の立場に立って考える訓練 ・自分の意見をきちんと言う訓練	○これまでのトレーニングが本時のトレーニングにつながっていることを理解させる。	一斉	
見通す	めあて 相手の意見をしっかりと聞き、自分の意見もしっかり言って、お互いに納得できるちょうどよいところに折り合いをつける訓練をしよう。			
見通す	2 折り合いをつけるということの意味と価値を、課題を考えることを通して理解する。 (課題1) 昼食のメニューの希望が食い違ったときの折り合いの付け方を考え発表する。	☆相手に委ねたり、自分の意見を通すだけでなく、お互いに納得できる結論を導き出すということの意味と価値をとらえさせる。	個	
見通す	3 課題に対して考える。 (課題2) 体育会の取り組みの朝練について「遅れた人への対策」を班で考えて、理由とあわせて発表する。 ・厳しい罰則を作る。 ・軽い罰則を作る。 ・罰則はつぐらなない。 ・その他	○班で話し合わせ、出させる。1つにまとまらない場合は2つ以上でも認める。 ☆話し合いの話題や方向をとらえて的確に話したり、相手の発言を注意して聞いたりして考えをまとめさせる。	班	表現、 技能
追求する	4 各班から出された意見を整理する。 ・朝練の目的を考え、2つの観点を導き出す。 「より多くの参加者が望める」 「楽しく活動できる」 ・その2つの観点到応じて各班から出された意見を図の中に位置づける。	○朝練の目的(みんなで、楽しく練習する)に気づかせ、観点を導き出させる。 ○各班の意見を2つの観点から分析させ、図の中に位置づけさせる。	一斉	表現、 技能
追求する	5 結論を決定する。 ・2つの観点をより実現するような結論を多数決ではなく集団の総意で決定する。	☆スキル・トレーニングという観点から、結論の妥当性よりも様々な意見からお互いの意見を尊重しながらちょうどよい結論を導き出そうとする態度とその価値を指導する。	一斉	思考、 判断、 実践
まとめる	6 本時のまとめを行う。 ・本時の学習で気づいたことや考えたこと書き、発表しあう。	○生徒の意見を取り上げながら、本時のまとめをする。個	個	
まとめる	まとめ(例) 相手の意見をしっかりと聞き、自分の意見もしっかり言って、お互いに納得できるちょうどよいところに折り合いをつけることは大切である。		一斉	

